



目白大学 新聞

第三九号

二〇一五年八月二〇日

The Mejiro University Journal

No.39

August 20, 2015

編集

目白大学社会学部

〒一六一一八五三九

新宿区中落合四一三二一

TEL

〇三一一五九九六一三三〇

15th
anniversary

目白大学・3学科 祝15周年

目白大学人間社会学部心理カウンセリング学科、社会学部のメディア表現学科と
社会情報学科が今年で創設15周年を迎えた。

本学では21世紀を見据えた「西暦2000年プロジェクト」のもと、

2000年4月新宿キャンパスに人間社会学部が新設され、新しい3学科が誕生した。

節目となるこの年、OG・OBの方々の当時の体験談や

将来を考えるうえでのアドバイスを聞いた。

心理カウンセリング学科

悲しみを笑顔に 〜気持ちから人を救うプロフェッショナル〜

目白大学人間社会学部(当時)心理カウンセリング学科の1期生として入学、
大学院に進み修士課程修了後、
筑波大学付属病院で臨床心理士として働く日高響子さん。
臨床心理士を目指したきっかけは、自身の辛い経験からくるものだった。
家族をガンで亡くし、病で肉親を失う痛みを知ったことで、
他人の気持ちの負担を軽くしたいと考えるようになった。
仕事としてできるなら、これしかない。
そういう強い志を持って目白大学に進学した。



ひだか きょうこ
日高 響子さん
目白大学人間社会学部(当時)心理カウンセリング学科1期生卒業。
現在、筑波大学付属病院で臨床心理士として勤務。

1 期生として入学し、
まだ部活もなかったため自らクロス部を立ち上げた。3年がかりで大会にも出場できるようになったが、それは紛れもなく応援し支えてくれた先生方のおかげでもあった。先生方とは普段から交流が多く、自分の指導教員でなくとも、研究室に行くといつても暖かく迎えてくれた。
「心理カウンセリング学科は本当に先生方との垣根がなく、どの先生にも何でも聞くことができた。職場で他大学の話を聞くとき、そうではなかったというところばかりだった。だから色々な先生と話し教わることができたのは、他大学にはない目白の良い特色だと思う」
また3年次に女子校へ実習に行ったことで、この先仕事に就くなら「人が成長する過程を知らなくてはだめだ」と、気が付いた。そう強く感じ自身が通った保育園に連絡を取り、ボランティアで手伝いをさせてもらった。さらに短期留学をし、バイトをしては旅行に行き、海外も5ヶ国を旅した。勉強だけでなく部活やバイト、旅行、留学、ボランティアと様々なことに挑戦した学生時代だった。「思ったらすべ行動」——日高さんの学生生活はまさにその言葉通りだった。
晴れて憧れの臨床心理士となり、家庭を持ったとはいえ、結婚と出産にはあまり欲がなかったという。
「勉強してこの仕事に就きたいという気持ちが強すぎて、それ

以外は本音に何も考えていなかったんです。結婚も子供も縁で授かりものでした。もちろん結婚して子供を持つてこつて経験ができてこそ幸せです。仕事だけの生活だったら意味がなさや、満たされない部分があったかもしれない。幸せだと思うまでには、もちろん苦労も多かった。独身時代と比べ、子育てをしながらまで通りに仕事を続ける難しさも痛感した。しかし、嬉しい経験も悲しい経験もすべてが実になり無駄なこととは何もない。仕事一筋だった自身の考えを変えてくれたのは紛れもなく家族だった。

そんな日高さんは最後に、「若いうちはやりたいことがアツいていい。あまりやみくもに手を出す必要もないけれど、学生時代の経験はすべての先の力になる。だからためらわず色々なことに取り組んでいてもらいたいです」とエールを送った。
(編集部3年 石田祐衣)

メディア表現学科

後悔しない選択

目白大学人間社会学部(当時)メディア表現学科を3期生として卒業し、
現在、資生堂デジタル事業部で働く山崎智史さん。
山崎さんは、高校生のころから映像作家や映像ディレクターを目指していた。
大学受験の際、「少しでも早く社会人になって、実践を積んだ方がいい」という先輩の言葉に触発され、映像系の授業が多く、実践的な学びができる目白大学への入学を決心した。

目白大学は元々女子大学だったため、山崎さんは男子学生の1期生にあたる。男性の1期生という点では、あまり苦勞しなかったが、まだ3期生だったため部活もなく、学園祭の前例もなかったため、創り上げていくのが大変だったという。そんな苦勞があったものの、大学時代に学んだことで山崎さんの考え方の幅が広がった。

「広告の授業を受けて、結構その影響を受けて。今までは映像や表現手法に興味がありましたが、広告を学ぶことでビジネスとして広告をやりたいなってきたんです。広告も要は一つの表現。ポスターもグラフィックもあるし、表現は別になんでもいから広告というビジネスにとても興味を持つきっかけとなったのを覚えています。広告ってこんなに深いんだって気付きました」

大学時代の学んだことを現在、どのようにならしているのだろうか。
「大学で学べることは、いわゆる概念を学ぶというところが一歩大きいと考えています。広告の可能性って授業でしか接することがなかったと思うし、広告には企画と表現があって、多々のことを学んだ。そしてインターンシップにも積極的に参加した。そんな精神的に活動していた山崎さんに、現在の目白大生に向けてメッセージは何かと聞いた。

「学生時代はある程度は何でも許される。例えば自分が20歳まで生きてきた中で後悔したこと、その間にできなかったことを残りの2年間でかなさるか可能でしょう。それぐらい積極的に行動した方がいいのではないだろうか。何でもやりたい方は、現在の仕事に活かしているという。山崎さんは高校時代、あまり思っていない。ちょっとでもやった方がいいと思ったりはあやしていただい。そうやって得た経験が社会人になって必ずや活かせると思う」
(編集部3年 小杉百合香)



やまざき ともし
山崎 智史さん
目白大学人間社会学部(当時)メディア表現学科3期生卒業。
現在、資生堂のデジタル事業部に勤務。

社会情報学科

社会は多様、今いる場所で 頑張ることが大切

目白大学人間社会学部当時社会情報学科を
2005年に卒業した竹内恵里子さんは、
現在、(株)ジャムの開発部でシステムエンジニア(SE)として活躍中。
SEとして、クライアントのシステムを構築、運用にあたっている。



たけうち えりこ
竹内 恵里子さん
目白大学人間社会学部(当時)社会情報学科卒業。現在、株式会社ジャムの開発部でシステムエンジニアとして活躍中。

が特徴でした。情報ネットワークにこたわらない方針が功を奏して、他分野、多領域を吸収する大切さを実感しました。大学院も似ていましたが、助産師さんがいたり、メイクアップアーティストの方がいたりして、多様な人の価値観は刺激になりましたね」

竹内さんは学科の学びの本質を今でも重要と説く。当時の自分の姿を鏡に、後輩に向けてエールを送る。

社会

社会情報学科では、情報との関わり方の基礎から学びました。

情報の見方、扱い方、社会や生活に関する情報を調査することなどです。また人と情報、コミュニケーション論など、幅広く学べたことが印象深いです。コンピュータを活用した授業の体験で、コンピュータに触れることで、自分の興味や将来の方向性を発見した竹内さんは、2期生として目白大学を卒業後、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科へ進学、さらに学びを深めた。

「大学で情報科目のアシスタントを経験しました。その時、NPOで何か新しいことができないかと考えました。同時に人や組織についても学ぶ必要性を感じ、半年間の受験準備を経て、大学院に進学しました。大学院ではNPOの仕組みを学ぶにつつ、ネット上のコミュニケーション、危機管理などを研究しました」

危機管理などの研究は、学びながら進んでいくのが、今思えば、研究対象は何でもありの柔軟さ

「現在の仕事はお客様のニーズにいかに対応できるかを常に考えながら開発を行っています。もちろん単に利便性だけを追求するのではなく、多様な情報、選択肢の中から、人と人、人と人がつながるのにベストな状態を探り、安定・信頼されるものを構築することが一番大切なことです」

目白大学在学中は情報コミュニケーション系のゼミに所属していた。落語を研究する同期もいたという。
(社会学部社会情報学科教授 松川秀樹)

Index

2面

社会学部3学科
研究・教育活動

Topics

目白大学卒業生が
かるたクイーンに!

3面

学生活動

Topics

日本を感じるジェラート
「あじさい」

4面

周辺地域

- 西武線沿線
ライオンズ「プリンセスナイト」
- 高田馬場
「ミッキーハウス」
- 中井
「染の小道フォトコンテスト」

大



学生が植樹の様子

センターでも2012年7月から活動が始まり、宮城県仙沼市本吉町前浜地区の「樫の森プロジェクト」の支援活動を行っている。

本学でも今年の5月から、私の受け持つ授業『現代社会論』での呼びかけに応じてくれた有志で、他大学や戸山シアタ活動館との協働が始まった。現地で

が、そして何よりも、自分が
育て植えた苗木が森になってい
く姿を想像し、日々の水やりや
取り組むことは、教育の原点だ
と考える。学生が見守る苗木
が、いつかその学生とともに大
木になることを期待している。
このボランティア活動を体験
した二人、社会学部社会情報学
科1年生 石原奈津子はこうコメ

思います。それは社会貢献をする
る良い機会でもあります。今回
の活動は、集まってきたメン
バー全員から考え、実行し
ました。そして今後もしまた
どこに挑戦していくつもりです」

(社会学部社会情報学科
専任講師 廣重剛史)



松



場を辞退し、新く
 こゝで注目された
 やまゆり
 表の山添百合6段
 イーンに輝いた東
 大学卒業生の坪田
 後「ようやくこゝ
 へやって来たとい
 う感じです」と、声
 を徹
 予選から振返

[illegible]

大きく膨らんでいっ
と坪田6段は速
い。姿勢が馴
れた。しかし
考が辛い。焦
療やフォームの改善
態でクイーン戦に挑
と坪田6段は速
い。姿勢が馴
れた。しかし
考が辛い。焦
療やフォームの改善
態でクイーン戦に挑



笑顔で本誌インタビューに答える坪田さん



笑顔で本誌インタビューに答える坪田さん

野球女子が熱い！

埼玉西武ライオンズ「プリンセスシリーズ」

増やせ！「野球女子」

2014年に流行語大賞に選ばれた「カープ女子」。リックスファンの「マリ姫」や阪神ファンの「うら子」など、プロ野球各球団の女性ファンに対する愛称が存在する。今、野球女子が急増している。

そして今年9月、埼玉西武ライオンズが「若生生命セ・パ交流戦」の西武プリンスドームで開催される計9試合で女性に向けた企画「ライオンズプリンセスシリーズ」が行われた。ライオンズの女性ファンだけでなく、西武プリンスドームに来る機会が少ないセ・リーグの球団の女性ファンや日曜野球観戦の機会のない女性に向けて、女子対象の様々なイベントやグッズ、グルメ、プレゼントなど、対戦カードごとに異なるスペシャルプログラムを用意した企画だ。

6月13日には、東京ガールズコレクションの公式ナイトパーティーである「TGC Night」とコラボした「LIONS GIRLS FES 2015」が行われた。スペシャルゲストには、タレントTGCモデルのマギーさんや、有末麻祐子さん・香川沙耶さんが登場した。試合終了後のグラウンドに、ランウェイが登場し、ゲストによるファッションショーやトークショー、プレゼント抽選会が行われた。多くの女性向け商品が溢れ、女性ファンに人気を博した。TGCのように女性の手にはサングラスなど多くの手土産が溢れていた。

13日以外の8試合は、試合終了後グラウンド解放して行われる女性対象の野球体験イベント「やまゆーウーマンナイト」が行われた。6月12日には、バック体験が開催され、グラウンドには女性たち



編集部員の石田祐衣さんがウエディングドレス試着体験して、選手の等身大パネルと記念撮影

の長蛇の列があった。このようなイベント以外にも、女性限定の「おもてなしブース」として美肌効果で有名な万座温泉の足湯ブースや、ボディリラクゼーションブース、ウエディングドレスの試着体験ブースが設けられた。

ウエディングドレスの試着体験

今回、この交流戦で女性対象の企画が誕生したきっかけは、西武プリンスドームはもとより、野球場へ、発信力のある「若い女性」を多く呼び込みたいという野球界全体の思いがあったからだ。来場する女性は30〜40代の方が多く、ライオンズが強かった時代を子どもの頃に過ごし、結婚してご主人と一緒に来る人や、小さな子どもがいるお母さんが多い。あとは50〜60代の秋山幸二選手や土藤公康選手がいた西武ライオンズの黄金時代を知っている世代だ。その世代を知っているファンの方は根強く、来場回数も多く、ファンクラブにも多くの女性向け商品が溢れている。ライオンズとの関係者は「女性ファンが増える機会に、これを機に多くの企業との興味をいかに生かしていきたい」と、これから若い女性をターゲットに球場を盛り上げる取り組みを実施していく予定だという。ライオンズ関係者は語っている。

「ライオンズプリンセスシリーズでは、プリンスホテルの協力を得て、様々なイベントを行ったが、これを機に多くの企業との興味をいかに生かしていきたい」と、これから若い女性をターゲットに球場を盛り上げる取り組みを実施していく予定だという。ライオンズ関係者は語っている。

「ライオンズプリンセスシリーズでは、プリンスホテルの協力を得て、様々なイベントを行ったが、これを機に多くの企業との興味をいかに生かしていきたい」と、これから若い女性をターゲットに球場を盛り上げる取り組みを実施していく予定だという。ライオンズ関係者は語っている。

「ライオンズプリンセスシリーズでは、プリンスホテルの協力を得て、様々なイベントを行ったが、これを機に多くの企業との興味をいかに生かしていきたい」と、これから若い女性をターゲットに球場を盛り上げる取り組みを実施していく予定だという。ライオンズ関係者は語っている。

「ライオンズプリンセスシリーズでは、プリンスホテルの協力を得て、様々なイベントを行ったが、これを機に多くの企業との興味をいかに生かしていきたい」と、これから若い女性をターゲットに球場を盛り上げる取り組みを実施していく予定だという。ライオンズ関係者は語っている。



ウエディングドレスの試着体験と抽選で始球式ができる「プリンセスピッチ」

チケットはライオンズ公式HPより購入可能。

「ミッキーハウス」

国際交流を育む英会話カフェ

田馬場の早稲田通り沿いのビル4階から、外国語が漏れ聞こえてくる。創業30年の英会話カフェ「ミッキーハウス」だ。他にも英会話カフェは数多くあるが、他とは大きく異なる特徴がある。ここは様々な国の人々が客として訪れ、日本人も外国人も年齢・職業・国籍問わず集まり、コーヒーや酒を片手に英語で会話ができる珍しい場所である。

4年前に以前のオーナーから店を譲り受けた内木雄太さんは、7年前からここに通っていた。最初は全く英語が話せず、週2〜3回のペースで店に通い続け、2年程度で話せるようになったという。

「英会話教室などでは、教科書やマニュアルを使い英語のソラを教えるけれど実践はしていない。教わっただけで使い慣れないから、日本人は筆記の勉強はできても、いつまでも話せるようになるにはなかなか難しい」と、母が通っていたからと二世代にわたり通う人もおり、同店では本当に様々な出会いが生まれる。ミッキーハウスで出会って結婚したカップルもいるという。

勉強する機会は神様からのプレゼント

勉強を通して感じる日本語の楽しさとは

現

在目白大学外国語学部中国語学科に通う陸宏子さんは普段は家庭を支える主婦だ。彼女にはあるひびきの夢があるという。「中国出身である私が一番よくできるのは母国語である中国語で。この自分が一番できる中国語を日本人に教えることができたらいな」と思っています。今はそのために今学期で勉強しています。

陸さんは20年ほど前に家族で来日した。当時は仕事と結婚、子育てなど色々あり、勉強をするという機会がなかったという。現在では子供も大学生になり、子育てが一段落ついた。そこで仕事を辞め、夢のために

い。ここはあくまで日常的な会話を目的とした場所。『英語をしゃべって身体で覚える』をテーマに開催しているの、しばらく続けていけば、勉強している感覚は一切なく知らない間に英会話のスキルが身に付くようになる。そう話す通り他にはなかなかない場所のため、下は中学生から上は87歳まで、遠方からも通って同店を訪れる。海外からもインターネットで調べて、寄る人も大勢いる。母が通っていたからと二世代にわたり通う人もおり、同店では本当に様々な出会いが生まれる。ミッキーハウスで出会って結婚したカップルもいるという。

そんな多くの人に愛されるカフェをより良い場所にするために内木さんは余念がない。ミッキーハウスは大きく2つの部屋に分かれており、会話テーブルと初級英語テーブルがある。内木さんが通っていた当初初級テーブルはなく、英語がわからない人は見よう見まねでひたすら会話をするようにしていた。ここはあくまで日常的な会話を目的とした場所。『英語をしゃべって身体で覚える』をテーマに開催しているの、しばらく続けていけば、勉強している感覚は一切なく知らない間に英会話のスキルが身に付くようになる。そう話す通り他にはなかなかない場所のため、下は中学生から上は87歳まで、遠方からも通って同店を訪れる。海外からもインターネットで調べて、寄る人も大勢いる。母が通っていたからと二世代にわたり通う人もおり、同店では本当に様々な出会いが生まれる。ミッキーハウスで出会って結婚したカップルもいるという。

そんな多くの人に愛されるカフェをより良い場所にするために内木さんは余念がない。ミッキーハウスは大きく2つの部屋に分かれており、会話テーブルと初級英語テーブルがある。内木さんが通っていた当初初級テーブルはなく、英語がわからない人は見よう見まねでひたすら会話をするようにしていた。ここはあくまで日常的な会話を目的とした場所。『英語をしゃべって身体で覚える』をテーマに開催しているの、しばらく続けていけば、勉強している感覚は一切なく知らない間に英会話のスキルが身に付くようになる。そう話す通り他にはなかなかない場所のため、下は中学生から上は87歳まで、遠方からも通って同店を訪れる。海外からもインターネットで調べて、寄る人も大勢いる。母が通っていたからと二世代にわたり通う人もおり、同店では本当に様々な出会いが生まれる。ミッキーハウスで出会って結婚したカップルもいるという。



ミッキーハウスのオーナー、内木雄太さん(手前、左)が外国人たちと店内で談笑

単語だけを並べて話せる。日本人は外国人に対して遠慮しているところがあるから、それをまっすぐして、たっさんの人が様々な国の人と触れ合っているの良さを知ってほしい。英語が話せるだけでなく、連日多くの出会いと別れがあり、一期一会の溢れるミッキーハウス。英語ができるようになった人、海外に興味がある人など、一度この非日常空間を体験してみてもいいだろうか。

(編集部3年 石田祐衣)

もう一度中国語を勉強するとう目的で目白大学に入学したという。父親が中国人、母親が日本人である陸さんは初めて日本を訪れた時の印象について質問したところ、「日本に初めて来たときは島根県に住む母方の祖父のものを訪ねた1990年頃だったと思います。その時に抱いた印象は『日本人はとても優しい』というものでした」という。初めて来日した際、陸さんは日本語を話すことができなかった。「言語の違い」という見えない壁がある陸さんにに対し、周りの人々は一生懸命に書いて説明してくれたり、たくさん話しかけてくれたりしたという。また

陸さんは他に敬語も難しいと感じている。謙譲語丁寧語といった種類があり、区別がつかない。陸さんは基本を暗記し、「この場面だとこれだ」と考え敬語を使用している。日本語を学んで楽しいと感じるのは、勉強して相手の話している内容を聞き取れた時だという。他にも落語のように、日常会話で使う日本語とは違う日本語があるという。日本語を学んで楽しいと感じている。陸さんは親子の間に「天竺」という共通の話題ができ、互いにいい刺激を受けているという。

「私は学生であり、母であり、主婦でもあります。他の学生と比べて抱えているものが多いかもしれませんが、そのため勉強以外のことを優先してはいけません。今後の学生生活の抱負について尋ねた。

(編集部3年 柳原千穂)



ひるこ 陸宏子さん

47歳・目白大学外国語学部中国語学科2年生。中国 吉林省 長春出身。

陸宏子さんは、中国語を勉強する中で、日本語を学ぶ楽しさを感じている。日本語を学んで楽しいと感じるのは、勉強して相手の話している内容を聞き取れた時だという。他にも落語のように、日常会話で使う日本語とは違う日本語があるという。日本語を学んで楽しいと感じている。陸さんは親子の間に「天竺」という共通の話題ができ、互いにいい刺激を受けているという。

陸宏子さんは、中国語を勉強する中で、日本語を学ぶ楽しさを感じている。日本語を学んで楽しいと感じるのは、勉強して相手の話している内容を聞き取れた時だという。他にも落語のように、日常会話で使う日本語とは違う日本語があるという。日本語を学んで楽しいと感じている。陸さんは親子の間に「天竺」という共通の話題ができ、互いにいい刺激を受けているという。



優秀賞

鈴木藤男さんのコメント

「まだ何色にも染まっていないこの無地の真っ白な布を一目見た瞬間に『他の染物よりも綺麗だ』と感じました。そして自分が撮影した写真のなかで一番自分の気持ちがそのまま表現できていたのがこの写真です」



優秀賞

“染の小道”第1回フォトコンテスト

5

月15日、目白大学新館キャンパス本館にて「染の小道」フォトコンテストの表彰式が行われた。

「染の小道」とは落合・中井で行われた染物を軸に、地域活性化を目指すプロジェクトである。フォトコンテストはそのプロジェクトの一環であり、今回が第1回目の開催となる。

第1回目である今回は、109点もの応募があった。その中から「中井の町の賑わい」を伝えている作品という探点基準で、最優秀賞1名、優秀賞3名、審査員特別賞1名が選ばれたのである。

中井を飾る染物を、彼らはどのような思いを込めてシャッターを切ったのだろうか。

(編集部3年 小杉・柳原)



植木弘明さんのコメント

「子供たちが楽しげに指さしているところをタイミングよく撮ることができた。次回は中井の町らしいところを撮って地元の人だからこそ伝わるような写真も撮ってみたい」



最優秀賞

大場哲也さんのコメント

「上から撮ったものと反対物ごとの色々な色が見えるので、こちらの方が華やかだな。そして、町の賑わいを感じられる一連の写真の中では、人がたくさん写っているものがいかな」と思い、選びました」

目白大学新聞

編集長
柳原千穂

編集部

浅見住那子
石田祐衣
海野由江
太田さらさ
小杉百合香
竹原可奈子
辰口貴子
塚越優
堀内結菜